

平安宮主水司跡・醬院跡、二条城北遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇二二―五

平安宮主水司跡・
醬院跡、二条城北遺跡

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安宮主水司跡・醬院跡、二条城北遺跡

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安宮跡・二条城北遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

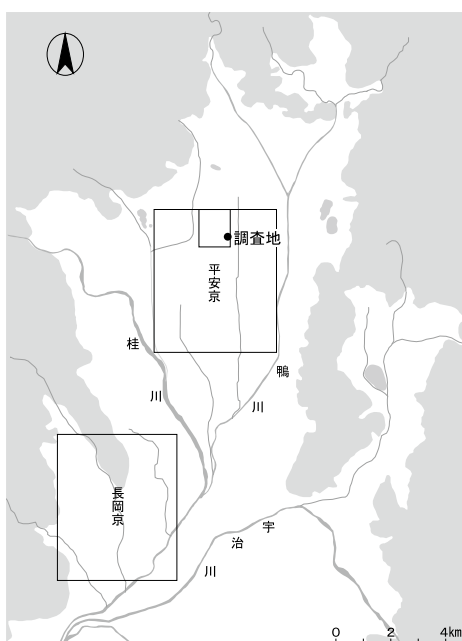
令和5年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮跡・二条城北遺跡（京都市番号 21 K 608、22 K 057）
- 2 調査所在地 京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1120番、日暮通丸太町上る西入西院町915番、千本通二条下る東入主税町936番
- 3 委 託 者 住友不動産株式会社 住宅分譲事業本部 事業計画部長 小島武郎
- 4 調査期間 2022年7月19日～2022年10月7日
- 5 調査面積 440㎡
- 6 調査担当者 松吉祐希・中谷正和・渡邊都季哉
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 松吉祐希
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 調査の方法と経過	3
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 調査地の歴史的環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 検出遺構	5
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 土器類	8
(3) 瓦埴類	13
5. ま と め	15

図 版 目 次

図版1	遺構	調査区平面図1 (1:120)
図版2	遺構	調査区平面図2 (1:120)
図版3	遺構	調査区北壁断面図 (1:80)
図版4	遺構	調査区東壁・西壁断面図 (1:80)
図版5	遺構	柱列1実測図 (1:50)
図版6	遺構	土坑5・33・113、溝74・101・137断面図、土坑32・42実測図 (1:50)
図版7	遺物	土坑36・140・34・113出土土器実測図 (1:4)
図版8	遺物	土坑5出土土器実測図1 (1:4)
図版9	遺物	土坑5出土土器実測図2 (1:4)
図版10	遺物	瓦類拓影及び実測図2 (1:4)
図版11	遺構	調査区全景 (西から)
図版12	遺構	1 土坑5遺物出土状況近景 (南西から) 2 土坑5遺物出土状況 (北西から)

	3	土坑5完掘状況（北から）
図版13	遺構	1 柱列1完掘状況（北から）
	2	柱列1 柱穴40半裁断面（西から）
	3	柱列1 柱穴44根固め石検出状況（西から）
	4	土坑120遺物出土状況（北西から）
	5	土坑42瓦出土状況（北東から）
	6	溝75遺物出土状況（北東から）
図版14	遺物	土坑34・113出土土器
図版15	遺物	土坑5出土土器1
図版16	遺物	土坑5出土土器2
図版17	遺物	溝75、土坑33・120出土土器

挿 図 目 次

図1	調査地と周辺調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（東から）	2
図4	作業状況（北東から）	2
図5	ドローンによる撮影状況（北西から）	2
図6	埋め戻し後状況（北東から）	2
図7	基本層序柱状図（1：20）	5
図8	土坑120遺物出土状況平面図（1：40）	6
図9	古墳時代の土器実測図（1：4）	8
図10	溝75、土坑33・183出土土器実測図（1：4）	11
図11	土坑32・120・139出土土器実測図（1：4）	12
図12	遺構面掘り下げ出土土器実測図（1：2）	12
図13	瓦類拓影及び実測図1（1：4）	13
図14	埴拓影及び実測図（1：4）	14
図15	遺構変遷図（1：400）	16
図16	京都所司代下屋敷絵図における調査地の位置	17

表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	8

平安宮主水司跡・齋院跡、二条城北遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の契機 (図1)

本調査は、(仮称)上京区主税町マンション建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1120番ほか位置し、二条城北遺跡、平安宮跡、江戸時代の京都所司代下屋敷跡にあたる。

マンション建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」とする)が試掘調査を行った結果、平安時代の遺物や江戸時代のピット・溝などが確認された。そのため、文化財保護課が原因者に対して埋蔵文化財調査の実施を指導し、調査が行われることとなった。調査は、原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から1面の遺構面を想定、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を確認し、調査地の歴史の変遷を明らかにすることを目的とした。

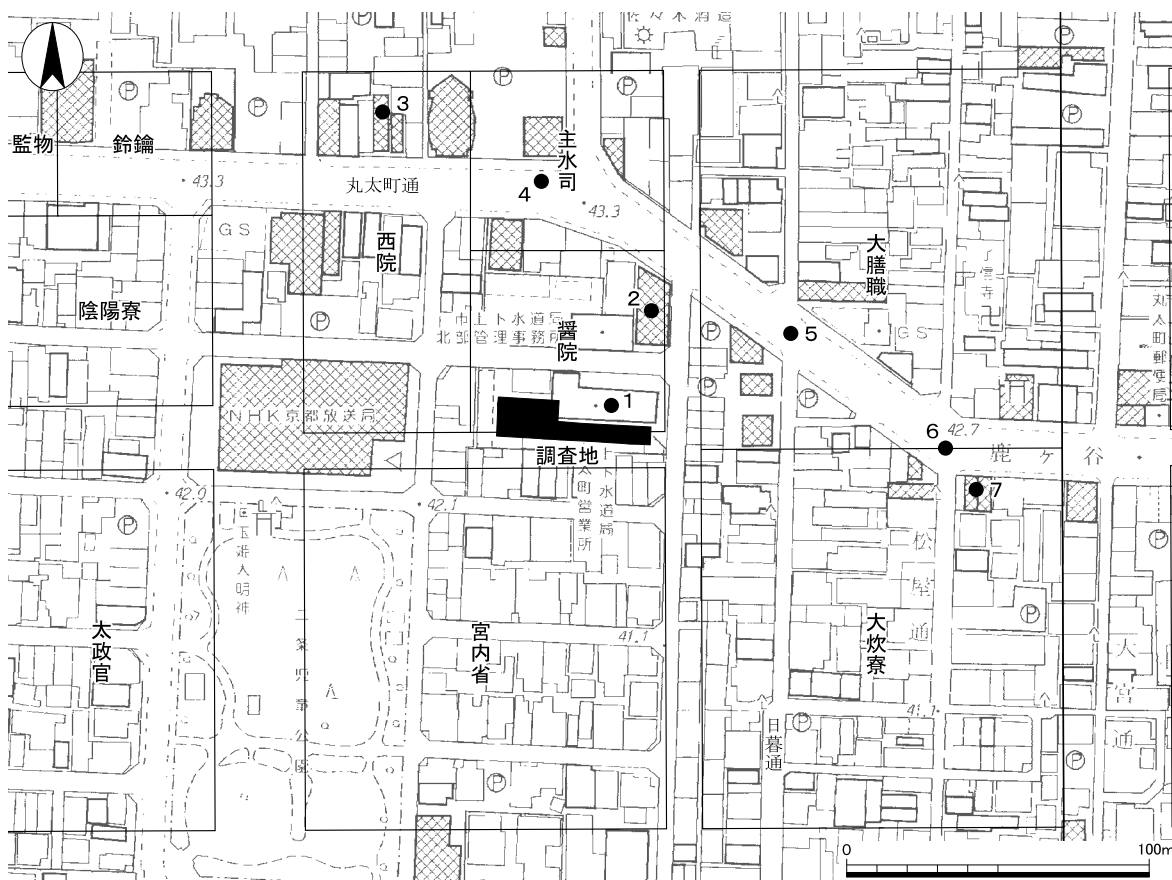


図1 調査地と周辺調査位置図 (1:2,500)

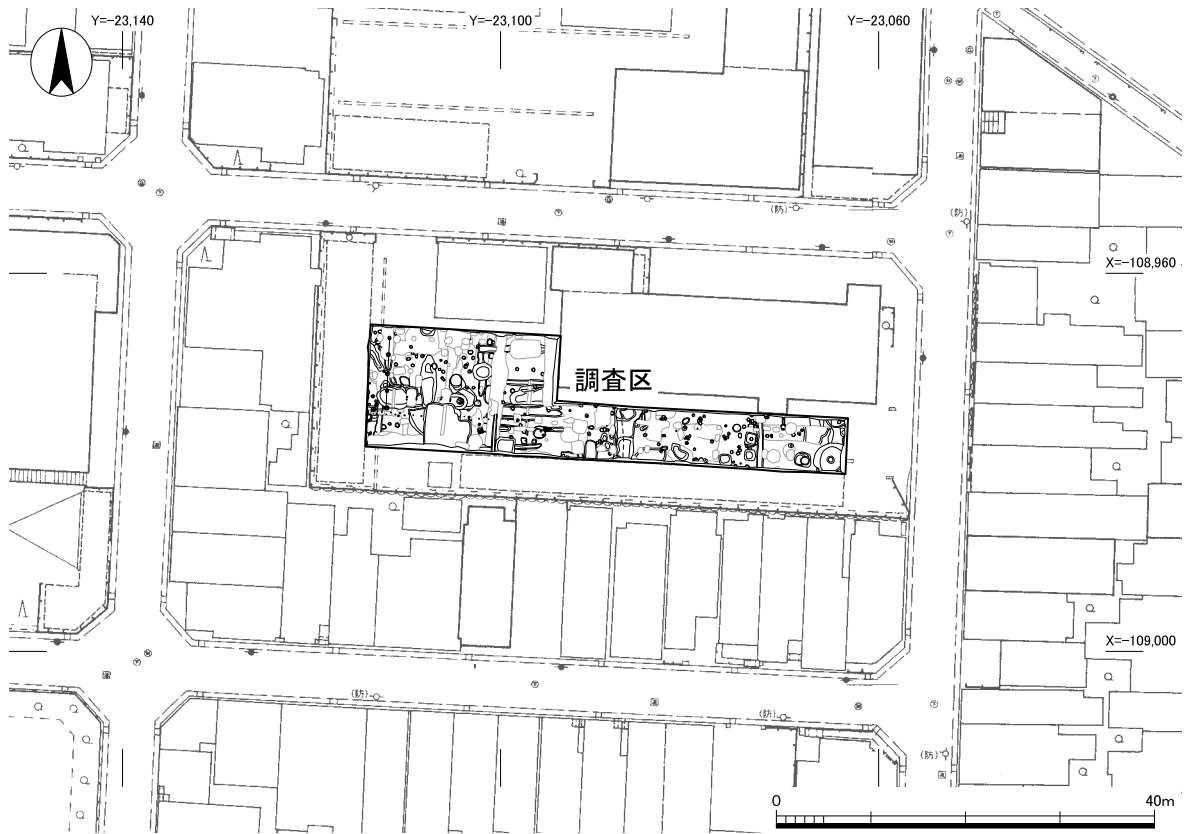


図2 調査区配置図 (1 : 800)



図3 調査前全景 (東から)



図4 作業状況 (北東から)



図5 ドローンによる撮影状況 (北西から)



図6 埋め戻し後状況 (北東から)

(2) 調査の方法と経過 (図2～6)

調査区は、東西51m、東から32mまでは南北6m、東から32m以西は南北13mの全体の平面形がL字形を呈する。面積は約440㎡である。

現代の盛土は重機を用いて掘削し、排土はダンプトラックにより調査区の北側の用地に仮置きした。遺構面の遺構検出及び掘削は人力で行った。検出した遺構については、平面図及び土層断面図などを作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査後は重機とダンプトラックにより埋め戻しを行った。調査期間は令和4年7月19日～10月7日である。

調査中は適宜、文化財保護課の指導及び、検証委員である同志社女子大学の山田邦和教授の視察を受けた。

2. 調査地の位置と環境

(1) 調査地の歴史的環境

調査地は、平安宮跡及び縄文時代から弥生時代の集落である二条城北遺跡にあたる。

平安時代、調査地は平安宮の南東部に位置し、醬院もしくは主水司にあたる。醬院と主水司は南北に置かれたとされるが、陽明文庫本『平安京宮城図』（陽明文庫所蔵）では北を主水司、南を醬院とするも、裏松固禪『大内裏図考証』では北を醬院、南を主水司としており、定かではない。醬院は大膳職に付属する施設で、醬や未醬などの調味料を保管しており、主水司は飲料水や氷室などの水に関する行事を掌っていた¹⁾。西には西院、南には宮内省、東には大膳職が置かれていた。

江戸時代には、調査地周辺に京都所司代が置かれる。寛永18年(1641)の『洛中絵図』（宮内庁書陵部所蔵）によると京都所司代は、二条城の北側に位置し、堀川通の西側から中屋敷、上屋敷、下屋敷が置かれた。下屋敷は東を日暮通、西を千本通、北を丸太町通に画されており、千本通に面することから千本屋敷と呼ばれていた。調査地は京都所司代下屋敷の南東部にあたる。下屋敷には、所司代の直臣や所司代付の足軽等が居住していた²⁾。

享保6年(1721)の『京都所司代千本屋敷絵図』（京都大学図書館所蔵）によると、下屋敷には御用屋敷を中心に71戸の武家住宅や長屋が並んでいたが、文化6年(1809)の『所司代千本屋敷絵図』（京都大学図書館所蔵）では下屋敷の敷地が北側の約1/3に縮小したことから、調査地は下屋敷外となったようである。

明治時代には、明治3年(1870)に徒刑場(現在の京都刑務所)が二条城の南より移転してきたことで、その一部となった。京都刑務所は、昭和2年(1927)に山科へ移転する。

京都刑務所の跡地となった調査地周辺は、昭和3年(1928)に、昭和天皇即位大礼を祝した大礼記念京都大博覧会の会場の一つとなっている。

その後、京都市水道局の営業所となり、平成27年まで存在した。

(2) 周辺の調査 (図1)

今回の調査地である齋院跡もしくは主水司跡では、2回の調査が行われている。今回の調査地と同じ敷地内で行われた調査1では、平安時代の土坑や、近世の溝・土坑が検出されている。平安時代の土坑からは、前期の土師器の杯・皿・高杯・甕が多量に出土している。また、出土遺構は不明であるが、須恵器杯蓋・杯身・皿・甕・瓶子・壺も出土した。須恵器杯の底部外面に「醬」と墨書された須恵器杯も確認されたことから、今回の調査地の存在する区画が齋院である可能性が高くなった。調査地北東部の調査2では、平安時代の溝・土坑、近世の柱穴・溝・土坑を検出した。平安時代の溝状の土坑からは、土師器・須恵器・緑釉陶器が多量に出土した。

調査地の北西側にあたる西院の調査3では、安土桃山時代の井戸・土坑を検出しており、井戸から金箔軒平瓦などの瓦類や多量の鉄滓や鞆の羽口などの金属器生産関連遺物が出土した。調査地の北側にあたる齋院もしくは主水司の調査4では、中世以降のピット・土坑を検出した。調査地の東側にあたる大膳職の調査5では、中世以降のピット・土坑を検出した。大膳職と大炊寮の間の調査6では、杭や板で護岸した溝を確認しており、大膳職と大炊寮を区画する東西方向の築地の南側の溝とみられている。調査地の南東側にあたる大炊寮の調査7では、近世の溝、土坑を検出した。いずれも近世の遺物とともに平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器が出土した。

註

- 1) 『平安時代史辞典』 角川書店 1994年
- 2) 大上直樹ほか「中井家絵図より見た京都所司代の上屋敷、中屋敷、下屋敷の建築について」『大阪市立生活科学部紀要』第49巻、2001年

周辺調査の引用文献

- 調査1 「第2章 平安宮主水司・齋院跡出土の土器・陶器」『平安京出土土器の研究』 財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年
- 調査2 「I 平安宮 主水司跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-II 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1978年
- 調査3 浪貝 毅「西院跡推定値発掘調査概要」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-I 京都市文化観光局 1977年
- 調査4～6 「18 中務省-大炊寮跡」『平安宮I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 「459 平安宮大膳職南限・中務省西限跡」『平安京研究資料集成 1 平安宮』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 調査7 木下保明「平安宮 大炊寮跡」『平安京跡発掘調査概報 1979年度』京都市文化観光局 1980年

参考文献

- 『平安宮I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 『平安京研究資料集成 1 平安宮』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7)

調査区の基本層序は、調査区の西部で現地表面から0.7mまで現代盛土、その下が基盤層（標高41.4m以下）、東部で現地表面から0.8～1.0mまで現代盛土、基盤層（標高41.1m以下）である。なお、調査区東部の一部では江戸時代の整地層（標高41.1～41.3m）も存在する。江戸時代の整地層は、礫や土器小片を含む極暗褐色粘質土で、約0.2mの厚さである。江戸時代とみられるが、詳細な時期は不明である。基盤層は暗褐色砂混粘土から黄褐色粘土である。

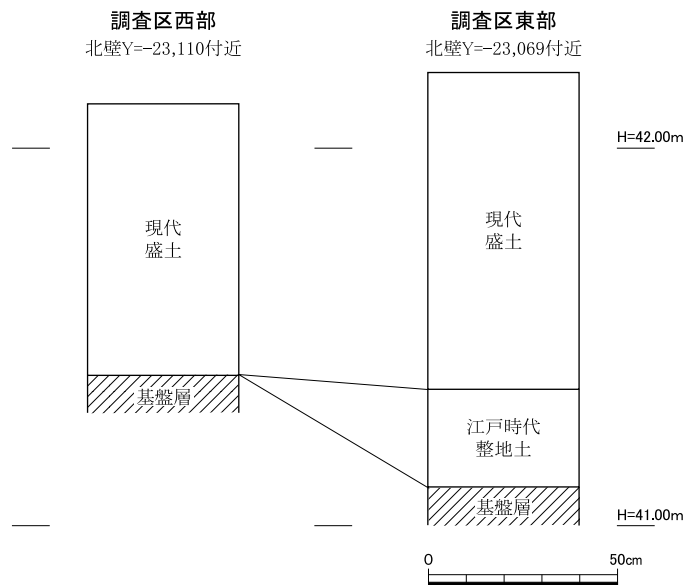


図7 基本層序柱状図 (1:20)

今回の調査では、基盤層直上で、平安時代から江戸時代の遺構を検出した。西側の検出面の標高は、東側よりも0.3mほど高い。

(2) 検出遺構 (図版1・2・11)

平安時代

土坑5 (図版6・12) 調査区西部で検出した南北に延びる溝状の土坑である。東西幅1.6m、南北長4.5m分検出した。深さは1.0～1.1mで、底面は小さな凹凸がある。最上層の炭化物を含んだ砂混粘土層から、平安時代前期（9世紀末から10世紀初め）の土器が多量に出土した。

土坑34 調査区西部で検出した土坑である。東西2m以上、南北2.4mの不定形を呈し、深さは0.3～0.4mである。平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）の遺物が出土した。

土坑36 調査区西部で検出した土坑である。東西1.3m以上、南北2.4mの円形を呈する。土坑の中央部分は現代の攪乱により削平される。平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）の遺物が出土した。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	土坑5・34・36・113・140	
安土桃山時代 ～江戸時代	柱列1、土坑32・33・41・42・54・70・120・183、 溝37・45・47・74・75・101・110・125・137・160	

土坑113（図版6） 調査区中央で検出した東西に延びる溝状の土坑である。南北幅2m、東西長3.5m以上で、深さは0.55mである。平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）の遺物が出土した。

土坑140 調査区東端で検出した土坑である。東西3.1m以上、南北3.1m以上の円形を呈し、深さは0.6mである。平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）の遺物が出土した。土坑の中央に直径0.75mの円形を呈する土坑を検出した。深さは0.15mである。この中央の土坑から遺物は出土していない。

安土桃山時代から江戸時代

柱列1（図版5・13） 調査区西端で検出したL字に曲がる柱列である。南北4間、東西1間分を確認しており、南北柱列の南端の柱から西に向って柱列が延びる。柱穴は約0.4mの円形を呈し、柱間は1.8mである。深さは検出面から0.2～0.7mで、柱穴の底面に根固め石を確認した。

土坑32 調査区西部で検出した土坑である。東西幅2.0m、南北幅1.8mの不整形を呈し、深さは1.1mである。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

土坑33（図版6） 調査区西部で検出した土坑である。東西5.0m、南北4.3m以上の不定形を呈し、深さは0.7～0.8mである。幾つかの土坑が重複しており、粘土採掘穴とみられる。江戸時代前期（17世紀前半）の遺物が多量に出土した。

土坑41 調査区西部で検出した土坑である。東西0.5m、南北0.7mの円形を呈し、深さは0.3mである。江戸時代の遺物が出土した。

土坑42（図版6・13） 調査区西部で検出した土坑である。東西0.75m、南北0.7mの円形を呈し、深さは0.15mである。底面で、棧瓦1枚とその周囲に割れた瓦数片を検出した。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

土坑54 調査区西部で検出した土坑である。東西0.5m、南北0.6mの隅丸方形を呈し、深さは0.2mである。江戸時代の遺物が出土した。

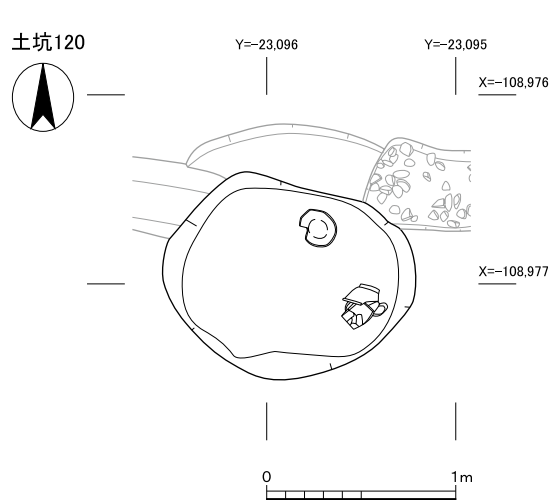


図8 土坑120遺物出土状況平面図（1：40）

土坑70 調査区西部で検出した土坑である。東西1.5m、南北2.6mの不整形を呈し、深さは0.3mである。東側が土坑33と重複していた。江戸時代の遺物の他、平安時代の瓦も出土した。

土坑120（図8、図版13） 調査区中央で検出した土坑である。東西1.35m、南北1.3mのほぼ正円形を呈し、深さは0.3mである。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

土坑183 調査区中央やや東寄り検出した南北に延びる溝状の土坑である。東西2.6m、南

北7.5mである。深さ0.8～1.0mと、底面に凹凸が確認できるため、複数回の掘削痕跡とみられる。江戸時代前期（17世紀前半）の遺物が出土した。

溝37 調査区西端で検出した南北溝である。東西幅0.6m、南北長3.7m以上で、深さは0.1mである。江戸時代後期（19世紀）の遺物が出土した。

溝45 調査区西部で検出した南北溝である。東西幅0.8m、南北長5.5m以上で、深さは0.15mである。江戸時代の遺物が出土した。

溝47 調査区中央で検出した東西溝である。南北幅0.8m、東西長9.3m以上で、深さは0.4mである。溝47・74・101・137は東西に平行する。溝45より西側では、これらの延長となる溝は検出できなかった。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

溝74（図版6） 調査区中央で検出した東西溝である。南北幅0.6m、東西長5.8m以上で、深さは0.3～0.5mである。安土桃山時代から江戸時代初期（16世紀末から17世紀初め）の遺物が出土した。

溝75（図版13） 調査区西部で検出した南北溝である。東西幅0.4m、南北長4m以上で、深さは0.2mである。安土桃山時代から江戸時代初期（16世紀末から17世紀初め）の遺物が多量に出土した。

溝101（図版6） 調査区中央で検出した東西溝である。南北幅1.0～1.2m、東西6.4m以上で、深さは0.08mである。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

溝110 調査区中央やや東寄りで検出した南北溝である。東西幅1.2m、南北7.5mで、深さは0.25mである。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。

溝125 調査区東部で検出した南北溝である。東西幅0.6m、南北長8.8m以上で、深さは0.2mである。江戸時代の遺物が出土した。

溝137（図版6） 調査区中央で検出した東西溝である。南北幅0.8m、東西長3.6mで、深さは0.08mである。江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀半ばから後半）の遺物が出土した。溝74・101と平行にはしる。

溝160 調査区東側で検出した南北溝である。東西幅0.3m、南北長0.8m以上で、深さは0.2mである。江戸時代の遺物が出土した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物整理用コンテナ34箱分の遺物が出土した。内訳は、土器・瓦類32箱、金属製品1箱、石製品1箱である。

平安時代の遺物は、残存状態の良い土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、緑釉陶器などが土坑から多量に出土した。安土桃山時代から江戸時代の遺物は、土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦などが溝や土坑から出土した。また、江戸時代の土坑出土遺物には、平安時代前期の遺物も含まれていた。

金属製品は銭貨、鉄製品など、石製品は砥石である。

以下、主要な遺構から出土した遺物を中心に概要を記す。遺物の時期は平尾政幸氏の土器編年案¹⁾を準用する。

(2) 土器類

古墳時代の土器 (図9、図版14 1)

1は須恵器杯蓋。口径13.2cm、器高3.7cm。底部外面をつよく削る。TK43型式。時期は6世紀後半。平安時代の土坑113から混入して出土した。

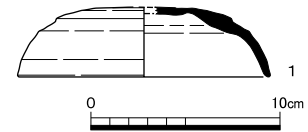


図9 古墳時代の土器実測図 (1:4)

平安時代の土器

土坑36出土土器 (図版7 2~4) 2~4は土師器。2は椀。口径12.7cm、器高3.9cm。3は杯。口径17.7cm、器高4.4cm。いずれも底部内面ナデ、内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面はヘラケズリ。4は甕。口径25.0cm。内面は横方向のハケ後オサエ、口縁部内外面ヨコナデ、外

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器		須恵器1点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類		土師器37点、須恵器19点、黒色土器5点、緑釉陶器6点、瓦類5点		
鎌倉時代 ~室町時代	瓦類		瓦類1点		
安土桃山時代 ~江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、瓦罔類、銭貨、鉄製品、砥石		土師器35点、施釉陶器8点、染付4点、瓦罔類5点		
合計		54箱	126点 (19箱)	1箱	34箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

面は縦方向にハケ目が残る。時期は京都1B段階に属する。

土坑140出土土器(図版7 5~8) 5~7は土師器。5は杯A。口径17.6cm、器高3.5cm。内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面ヘラケズリ。6・7は皿。6は口径18.4cm、器高2.0cm。7は口径19.8cm、器高2.3cm。内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面ヘラケズリ。8は須恵器。内面に同心円当て具痕跡が残っており、甕の破片とみられる。内面と破面の一辺にベンガラ²⁾が付着していた。ベンガラのパレットとして使用したものとみられる。時期は京都1B段階に属する。

土坑34出土土器(図版7・14 9~17) 9~16は土師器。9・10は椀A。9は口径13.4cm、器高3.6cm。10は口径14.6cm、器高4.1cm。いずれも底部内面ナデ、内面ヨコナデ、外面はケズリ。11は杯B。口径18.8cm、底径12.0cm、器高5.0cm。底部内面ナデ、内面ヨコナデ、外面はケズリ。12・13は皿。12は口径17.8cm、器高2.2cm。13は口径17.8cm、器高2.4cm。いずれも全体的に摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、外面はケズリを施す。14は蓋。口径29.0cm、器高5.3cm。直径2.8cmのボタン状のつまみをもつ。外面にミガキを施す。15・16は甕。15は口径24.0cm。内面は同心円当て具痕跡が残る。16は口径25.0cm。内面オサエ、体部外面タタキの後、ハケ。17は須恵器杯A。口径12.7cm、器高4.5cm。内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリの後ナデ。時期は京都1B段階に属する。

土坑113出土土器(図版7・14 18~25) 18~24は土師器。18・19は椀A。18は口径12.6cm、器高3.7cm。19は口径12.7cm、器高4.2cm。いずれも底部内面ナデ、内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面はヘラケズリ。20は杯A。口径19.0cm、器高4.5cm。底部内面ナデ、体部内面ヨコナデ、外面はヘラケズリ。21・22は皿。21は口径15.1cm、器高2.5cm。22は口径16.9cm、器高2.6cm。いずれも底部内面ナデ、体部内面ヨコナデ、外面はヘラケズリ。23は高杯の杯部。脚部を欠損する。口径18.7cm。内外面ともにミガキを施す。24は甕。口径17.1cm。体部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ。25は須恵器壺。肩部から底部にかけて残存する。底径7.6cm、残存器高15.8cm。外面肩部には自然釉が付着する。内外面ロクロナデ、底部内面はナデ。時期は京都1B段階に属する。

土坑5出土土器(図版8・9・15・16 26~68) 26~41は土師器。26~28は椀。口径13.0~14.4cm、器高2.5~2.9cm。29~33は杯。口径14.9~15.6cm、器高2.5~3.7cm。椀・杯いずれも体部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ。33は底面に回転糸切痕が残る。体部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ。34・35は皿。34は口径14.4cm、器高1.9cm。35は口径18.2cm、器高3.0cmで、外面ヘラケズリ。36・37は杯B。36は口径16.3cm、器高4.2cm。37は口径19.7cm、器高2.8cmで、外面ヘラケズリ。38・39は高杯。いずれも杯部と脚部が残存する。脚部は7面に鋭く面取りする。摩滅のため、杯部の調整は不明瞭である。40・41は甕。40は口径17.3cm。外面はオサエ、内面板ナデ。外面に黒斑が付着する。41は口径20.4cm、器高21.4cm。外面は格子目タタキの後にナデ。内面は同心円当て具痕跡が残る。

42~57は須恵器。42~49は杯A。口径11.9~14.8cm、器高3.2~5.5cm。42・46・49は口縁部外

面に重ね焼き痕跡が残る。49は底部内面に2本の線刻を施す。43は口縁部内外面に煤が付着する。45は外面にはいわゆる火櫓状の痕跡が残る。50・51は皿。50は口径13.0cm、器高2.0cm。外面に火櫓状の痕跡が残る。51は口径13.5cm、器高1.7cm。底部内面に煤が付着する。52・53は杯B。52は口径14.0cm、器高5.7cm。外面に2本の線刻を施す。53は口径18.2cm、器高6.0cm。54は壺の底部。底部外面に墨の痕跡が残っており、転用硯とみられる。55は壺の口縁部から頸部。口径11.2cm。内外面ロクロナデ。内外面ともに自然釉が付着する。56は壺の肩部から底部。底径10.8cm。底部内面ナデ、内面から肩部外面にかけてロクロナデ、外面胴部はロクロナデ後にタタキ、ナデ。底部外面はケズリ、高台を貼り付ける。57は甕。口径14.9cm、器高43.3cm。内面は同心円文当て具痕跡が残る。外面はタタキ、口縁部内外面ヨコナデ、内面口縁部から外面にかけて自然釉が付着する。

58～62は黒色土器。58・59は椀。いずれも内面は黒色を呈し、ミガキを施す。58は口径15.5cm、器高4.0cm。59は口径18.7cm、器高5.7cm。高台がつく。60～62は甕。いずれも底部を欠損する。口径は60が15.7cm、61が17.1cm、62が18.8cm。内面は黒色を呈し、横方向にミガキを施す。

63～68は緑釉陶器。63～65は椀。63は口径13.9cm、器高5.2cm。胎土は灰白色を呈し、須恵質である。オリーブ灰色の釉を施す。貼り付け高台。東海産。64は口径15.8cm、器高4.6cm。削り出し高台。胎土は灰白色を呈し、軟質である。浅黄色の釉を施す。京都産。65は口径16.5cm、器高5.4cm。削り出し高台。胎土は灰色を呈し、須恵質である。灰オリーブ色の釉を施す。いずれも底部内面に重ね焼きの痕跡とみられる粘土が付着する。京都産。66・67は皿。66は口径13.6cm、器高5.6cm。削り出し高台。京都産。67は口径15.9cm、器高2.8cm。削り出し高台。いずれも胎土は灰白色を呈し、軟質である。内面と外面口縁部ロクロナデ、外面回転ヘラケズリの後、浅黄色の釉を施す。京都産。68は四足壺。口縁部はやや歪んで楕円形を呈しており、口径12.0～12.4cm。器高19.9cm、胴部の最大径は22.0cm。口縁部は上方に立ち上がり、体部は二重突帯を3段貼り付ける。脚は貼り付けており、上段の突帯まで細長く伸びる。胎土は灰白色を呈し、軟質である。内面口縁部から肩部以外に浅黄色の釉を施す。猿投産。時期は京都2B段階に属する。

安土桃山時代から江戸時代の土器

溝75出土土器（図10、図版17 69～86） 69～86は土師器。69～73は皿Sb。口径9.4～9.7cm、器高1.9～2.3cm。74～86は皿S。74～80は口径9.8～10.9cm、器高2.0～2.3cmの小型。81～86は口径12.2～14.3cm、器高2.1～2.7cmの大型。いずれも底部内面ナデ、内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面オサエを施す。76・77・79・81は口縁部内外面に煤が付着する。時期は京都11A段階に属する。

土坑33出土土器（図10、図版17 87～95） 87～93は土師器皿。87～90は口径9.3～10.0cm、91・93は口径11.0～11.4cm。88・90～92は口縁部内外面に煤が付着する。94は土師器火入れ。脚が3箇所つく。95は施釉陶器椀。灰色の釉を施す。口径11.3cm。時期は京都11B段階に属する。

土坑183出土土器（図10 96～103） 96～98は土師器。96・97は皿。96は口径10.0cm、器高1.9cm。97は口径11.5cm、器高2.0cm。いずれも口縁部内外面に煤が付着する。98は焙烙。口縁部のみ残存する。口径30.1cm。口縁部は面をつくり、端部は上につまむ。外面に煤が付着する。99は焼

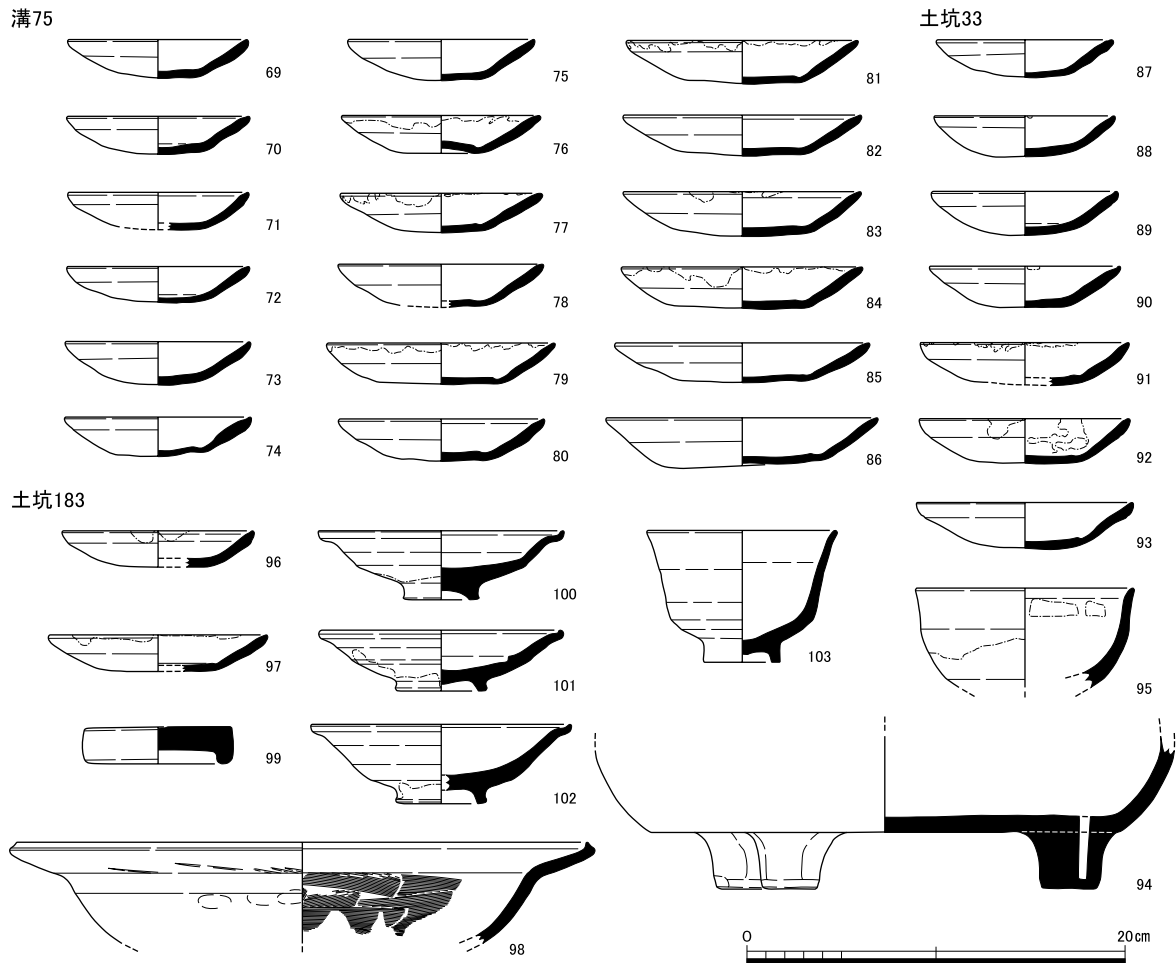


図10 溝75、土坑33・183出土土器実測図（1：4）

塩壺蓋。口径6.6cm、器高2.0cm。内面には布目が残る。100～102は施釉陶器皿。100は口径12.9cm、底径3.9cm、器高3.7cm。101は口径12.6cm、底径4.6cm、器高3.2cm。102は口径13.7cm、底径3.9cm、器高4.2cm。いずれも唐津産。灰～灰白色の釉を施す。高台は削り出し。底部内面に砂目が残る。100～102は寸法・色調ともに類似する。103は施釉陶器碗。灰白色の釉を施す。高台は削り出し、離れ砂が付着する。時期は京都11B段階に属する。

土坑32出土土器（図11 104～107） 104は土師器鍋。口径28.2cm。型成形による。内面ヨコナデ。内面全体に煤が付着する。105は施釉陶器壺。内外面ともに灰褐色の鉄釉を施す。106・107は染付碗。いずれも高台は釉剥ぎ。106は口径11.0cm、器高6.0cm。内外面に貫入あり。外面に草花文や蝶を描く。107は口径11.0cm、器高6.1cm。高台に離れ砂が付着する。外面に草花文を描く。時期は京都13段階に属する。

土坑139出土土器（図11 108・109） 108・109は染付皿。108はほぼ完形で、口径11.9cm、底径4.6cm、器高3.5cm。高台は削り出し、離れ砂が付着する。高台は釉剥ぎ。底部内面中央に花文、口縁部内面に草文を描く。109は口縁部を欠く。底径8.4cm。高台は削り出し。高台は釉剥ぎ。底部内面に樹木や塔とみられる建物などの風景を描く。江戸時代後期。

土坑120出土土器（図11、図版17 110～114） 110・111は土師器焙烙。いずれも口縁部のみ

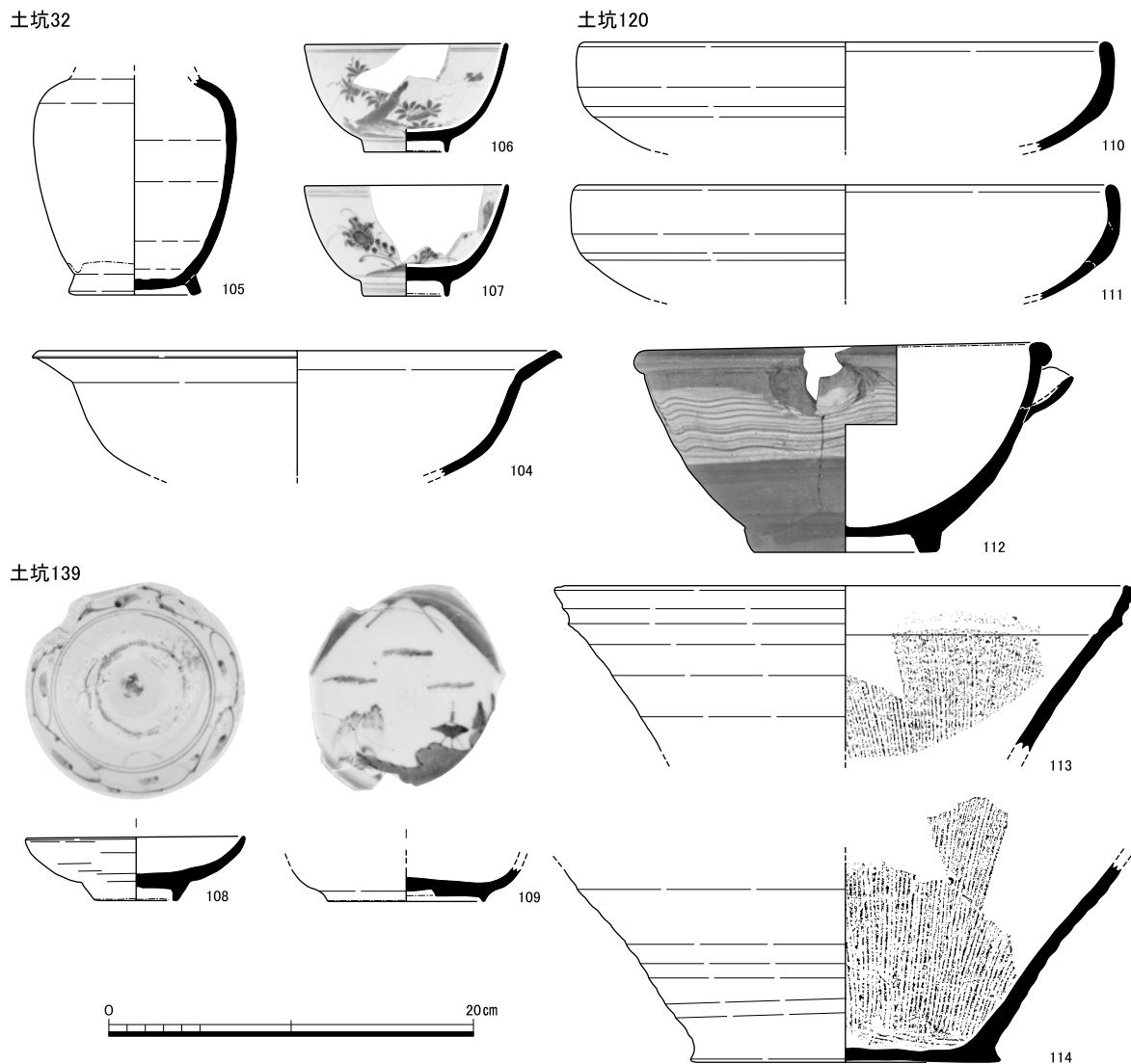


図11 土坑32・120・139出土土器実測図（1：4）

の残存。口縁端部を丸くおさめる。110は口径28.5cm、111は口径29.0cm。112は施釉陶器片口鉢。ほぼ完形だが、注口部が一部欠損する。口径21.5cm、底径10.0cm、器高11.5cm。高台は削り出し。胎土は橙色、内面から外面体部上半にかけて灰白色の釉を施す。唐津産。113・114は施釉陶器播鉢。内外面ともに鉄釉。113は口縁部のみ残存する。口径は31.0cm。体部内面に9条1単位の播り目が入る。114は体部から底部にかけて残存する。底径16.9cm。底部内面には8条1単位、体部内面には隙間なく播り目が入る。時期は京都13段階に属する。

遺構面掘り下げ出土土器（図12 115） 115は土師器。縦3.6cm、横2.8cmの破片であるが、内外面に金箔が貼られている。

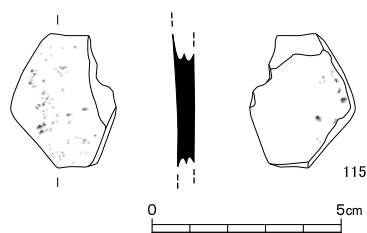


図12 遺構面掘り下げ出土土器実測図（1：2）

(3) 瓦埴類

軒丸瓦（図13 瓦1～3） 瓦1は単弁蓮華文。蓮華文の周囲には二重圈線がめぐり、外区には珠点を配す。瓦当から丸瓦部にかけて緑釉を施す。瓦当を横断する筈傷が認められる。裏面には布目が残る。胎土は浅黄橙色の軟質。平安時代中期。土坑33から出土した。

瓦2は複弁七弁蓮華文。中房は1+5。外区には珠点を配す。平安時代後期。攪乱から出土した。

瓦3は巴文。周囲に珠点がめぐる。瓦当部分にキラコが付着する。江戸時代。土坑41から出土した。

軒平瓦（図13 瓦4～7） 瓦4は重郭文。重郭の内部には一条の突線を配す。重郭の上下の間隔は2.7cm。搬入瓦。土坑33から出土した。

瓦5は均整唐草文。中心は対向C字、左右に唐草文を配す。外区に珠点がめぐる。平安時代中期。土坑33から出土した。

瓦6は上半に唐草文、下半に珠点を配す。上端は欠損する。平安時代後期。土坑33から出土した。

瓦7は均整唐草文。裏面の瓦当と平瓦の接合部に凹型台圧痕が残る。中世。土坑70から出土した。

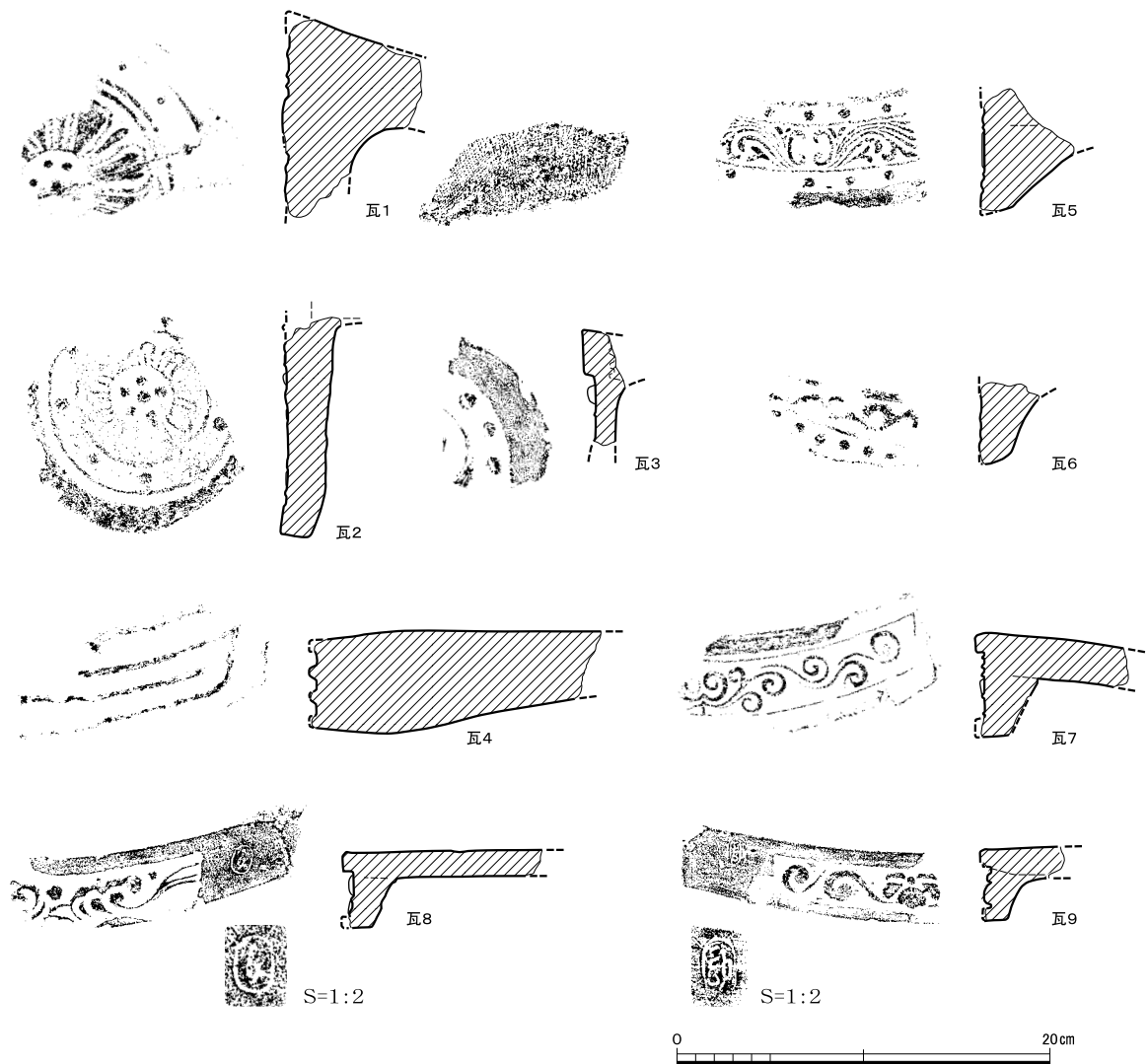


図13 瓦類拓影及び実測図1 (1:4)

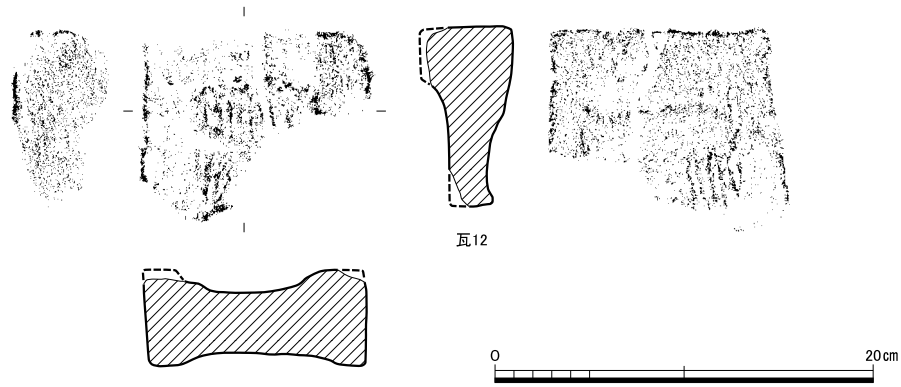


図14 磚拓影及び実測図（1：4）

軒棧瓦（図13、図版10 瓦8～11） 瓦8は立浪文。右脇縁を面取りする。瓦当右端に判が押される。江戸時代。土坑33から出土した。

瓦9は唐草文。中心に花文を、左右に2転唐草文を配す。瓦当左端に一文字とみられる判が押される。瓦当部分にキラコが付着する。溝160から出土した。

瓦10は唐草文。中心に三葉文を、左右に2転唐草文を配す。瓦当部分にキラコが付着する。平瓦部に釘穴があく。土坑42から出土した。

瓦11は唐草文。角瓦である。瓦当右端に一文字とみられる判が押される。平瓦部に3つの釘穴があく。土坑42から出土した。

磚（図14 瓦12） 瓦12は有孔磚。上面・下面ともに中央部が凹み、縦方向に縄目がつく。土坑70から出土した。

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B C	A B	A B A B	A B	

2) 龍谷大学文学部歴史学科 山田卓司氏にご教示頂いた。

5. まとめ

今回の調査では、平安時代前期、安土桃山時代から江戸時代前期初め、江戸時代中期半ばから後期初めの遺構を確認した。平安時代前期以降、中世にかけての遺構は確認できなかった。

以下、図15をもとに時期ごとに遺構の変遷を記す。

平安時代前期

土坑5・34・113・140を検出した。土坑5・34・113の南端は $X=-108,974$ の位置に揃う。これらの土坑からは多量の遺物が出土していることから、土器の廃棄土坑とみられる。一方で、土坑140からの遺物出土量は少なく、前者の土坑群とは性格が異なる可能性がある。

平安時代の当該地は、平安宮の南東部に位置し、齋院と宮内省の境界にあたる。陽明文庫本『平安京宮城図』（陽明文庫所蔵）などによると、齋院と宮内省の間には東西方向の宮内道路が存在しており、道路の幅は4丈とされる¹⁾。発掘調査では確認されていないが、調査地付近における宮内道路の北築地心の位置は、 $X=-108,977$ と想定される。このことから、調査区の $X=-108,977$ 以北は齋院の区画、 $X=-108,977$ 以南は宮内道路となる。

今回の調査地では、平安時代の遺構の密度が少なく、かつ廃棄土坑がみられた。また、土坑5・34・113の南端が宮内道路の北端と想定した位置に収まる。これらのことから、これらの土坑は齋院の南端部に掘られた廃棄土坑である可能性が高い。

なお、土坑140からは平安京遷都直後の土器が出土した。またベンガラのパレットと考えられる土器片も出土しており、平安京造営との関係も考えられる。

安土桃山時代から江戸時代前期初め（16世紀末から17世紀前半）

安土桃山時代から江戸時代初期の溝75や江戸時代前期の溝74、土坑33・183などを検出した。土坑33や183は廃棄土坑とみられる。この時期には、京都所司代下屋敷が置かれたことがわかっている。この頃の絵図などは残っておらず、詳細は不明であるが、下屋敷関連の遺構とみられる。

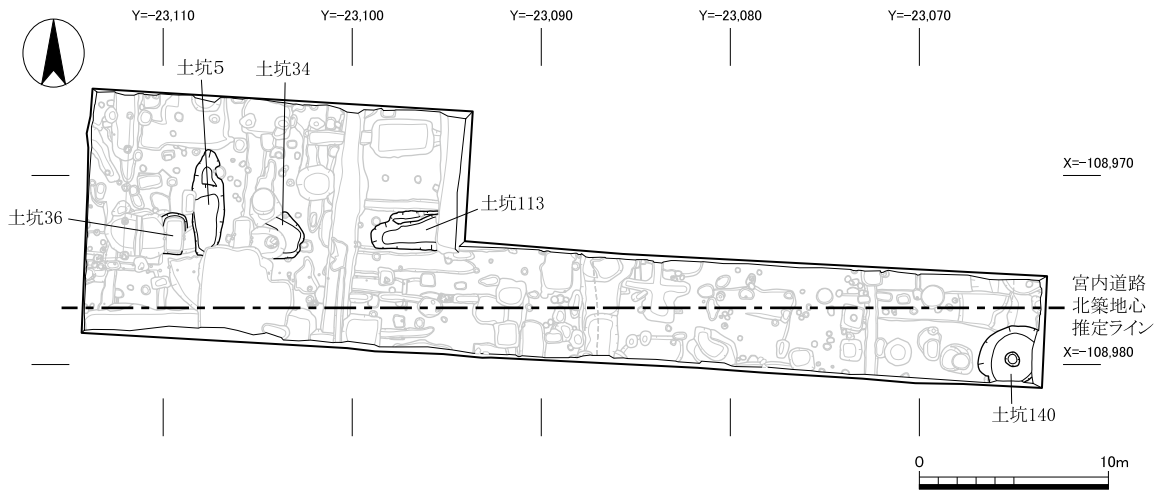
江戸時代中期半ばから後期初め（18世紀中頃から後半）

溝37・47・101・110・137、土坑32・42・120などを検出した。これらの溝は耕作に伴う溝とは考えにくく、区画に伴う溝とみられる。

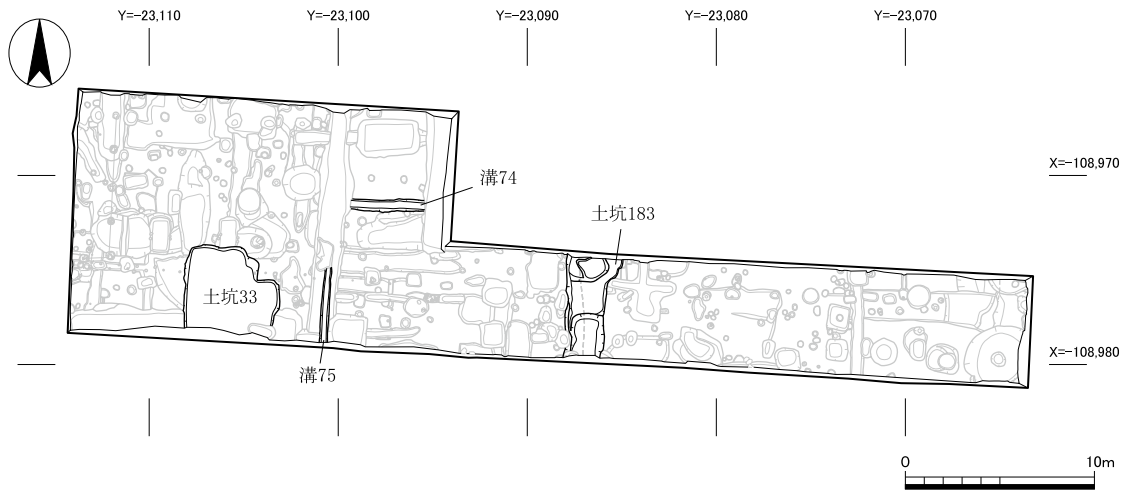
この時期には、元禄4年（1691）、享保6年（1721）の2つの絵図が存在する。元禄4年の『所司代御下屋敷境町持家之地尻見分』（京都府立総合資料館所蔵）によると、下屋敷の区画の中央に所司代が置かれ、北端と東端には1列分の町屋が並び、南端の東側と北西には耕作地である「佃」が広がっていた。調査地は、所司代の南東部に位置するとみられる。

享保6年の『京都所司代千本屋敷絵図』（京都大学図書館所蔵）によると、町屋や耕作地は撤去され敷地が拡張される。敷地の中央やや東側に御用屋敷、その周囲に武家屋敷が約70戸存在した。

平安時代前期



安土桃山時代～江戸時代前期初め(16C末～17C前半)



江戸時代中期半ば～後期初め(18C中頃～後半)

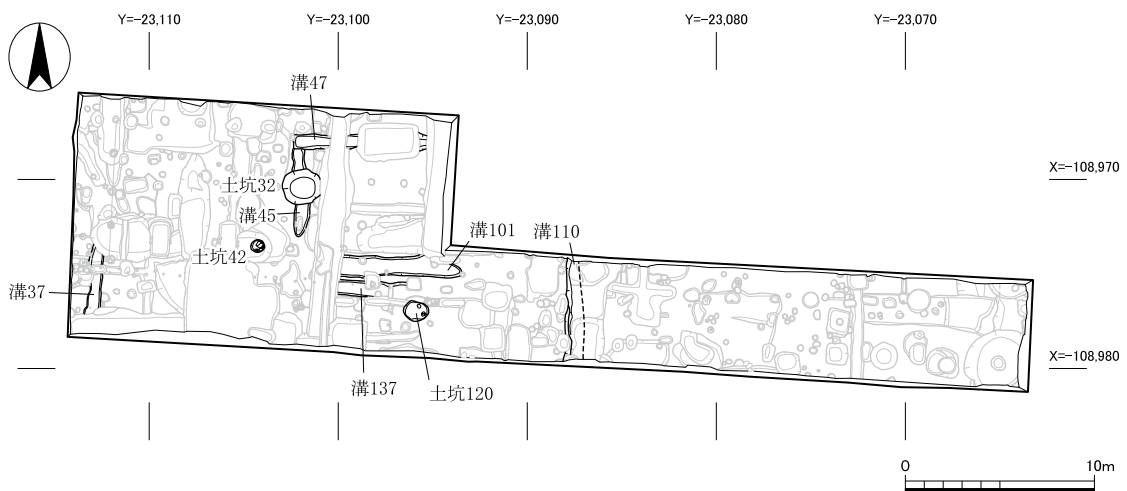
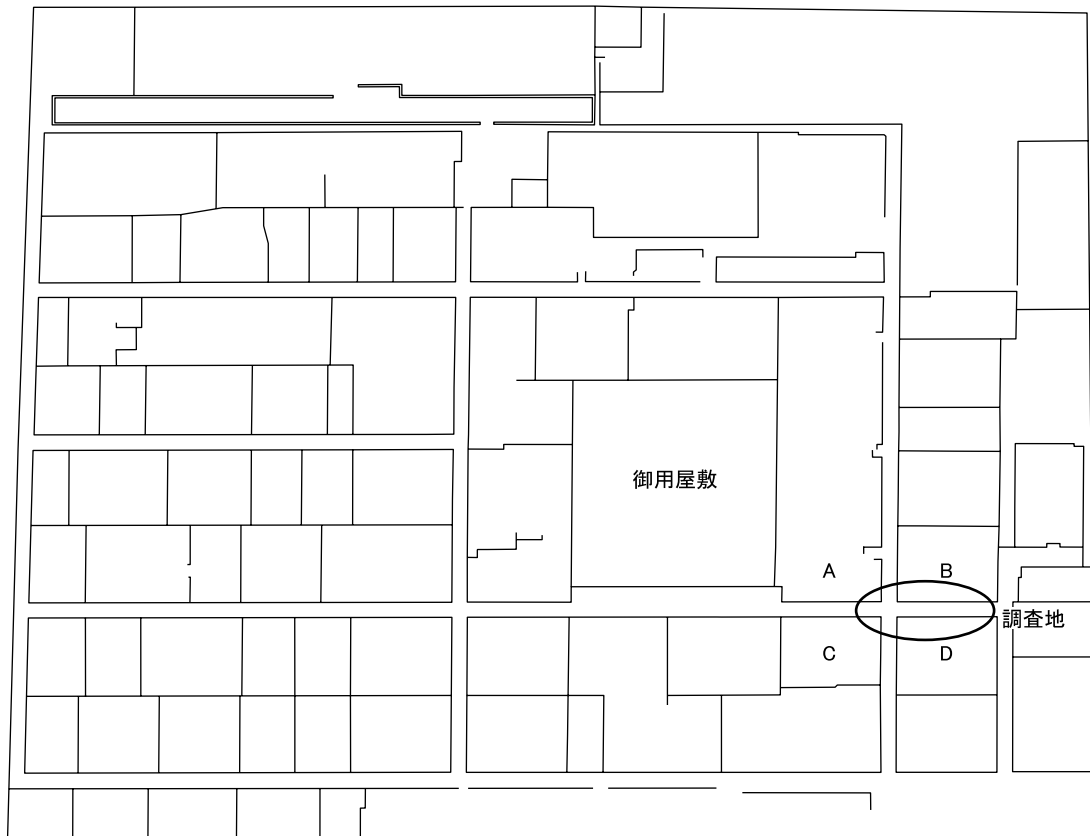


図15 遺構変遷図 (1 : 400)



『京都所司代千本屋敷絵図』(京都大学図書館所蔵)をトレース・加筆

図16 京都所司代下屋敷絵図における調査地の位置

その後、文化6年(1809)の『所司代千本屋敷絵図』(京都大学図書館所蔵)では、下屋敷の敷地が減少しており、北側約1/3のみとなる。調査地は下屋敷外となった。

今回の調査では、18世紀中頃から後半の遺構を検出しており、享保年間の絵図が参考になると考えられる。

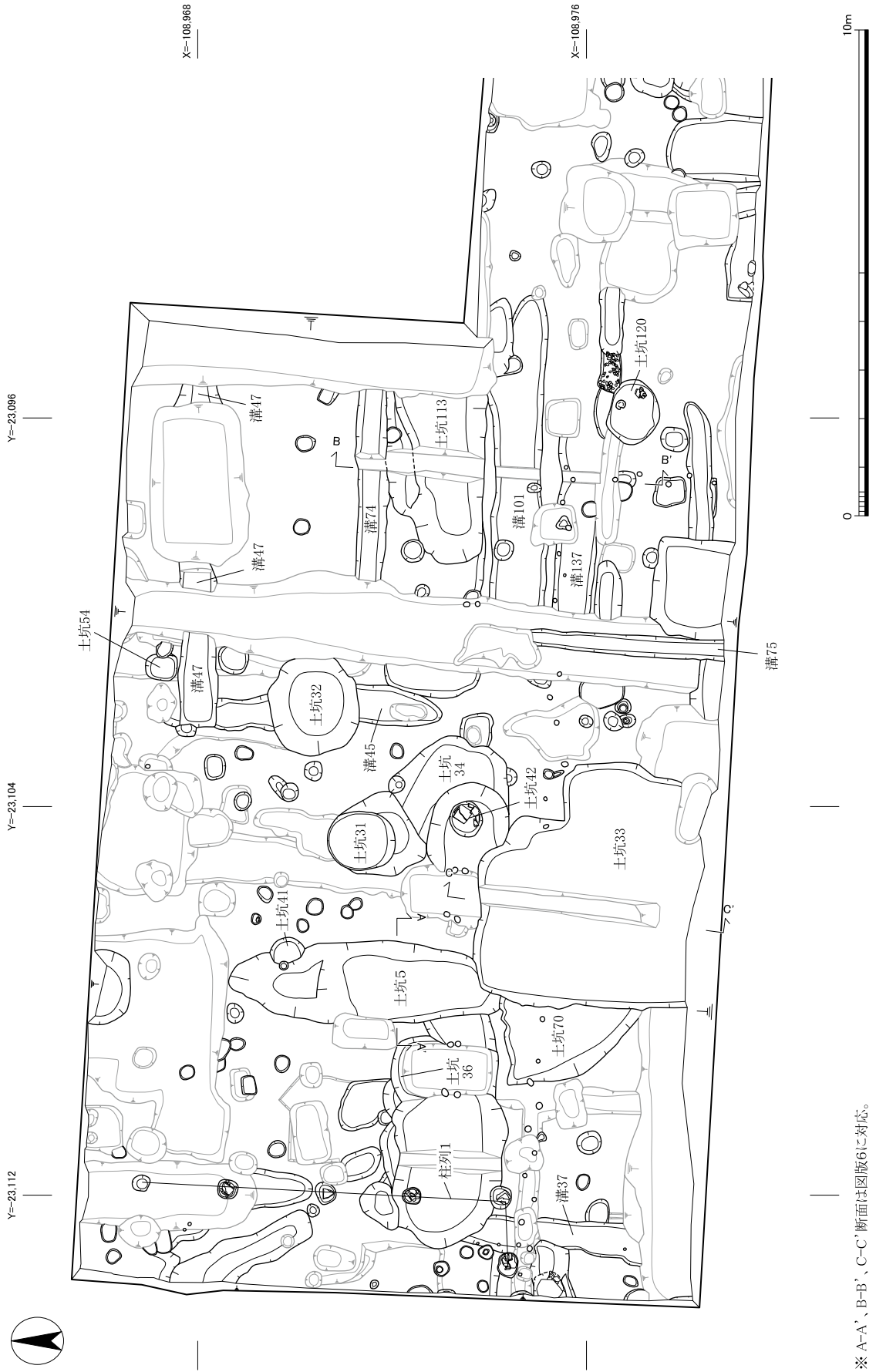
前述の通り〔2.(1)調査地の歴史的環境 参照〕、京都所司代下屋敷は二条城の北側に位置し、東を日暮通、西を千本通、北を丸太町通に画されていた。享保年間の『京都所司代千本屋敷絵図』(京都大学図書館所蔵)に大正時代の都市計画図を合わせ、現代の地図に当てはめると、今回の調査区はおおよそ図16で示した位置となる。屋敷地A・B・C・Dを区画する東西道路と南北道路の交差点にあたることから、溝47と溝101もしくは溝137が東西方向の道路に伴う溝であった可能性が高い。溝101と溝137は近い距離に平行して走っており、区画溝の造り替えとみられる。また溝45と溝37も南北方向の道路に伴う溝とみられる。

註

- 1) 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年、
『平安京提要』角川書店 1994年

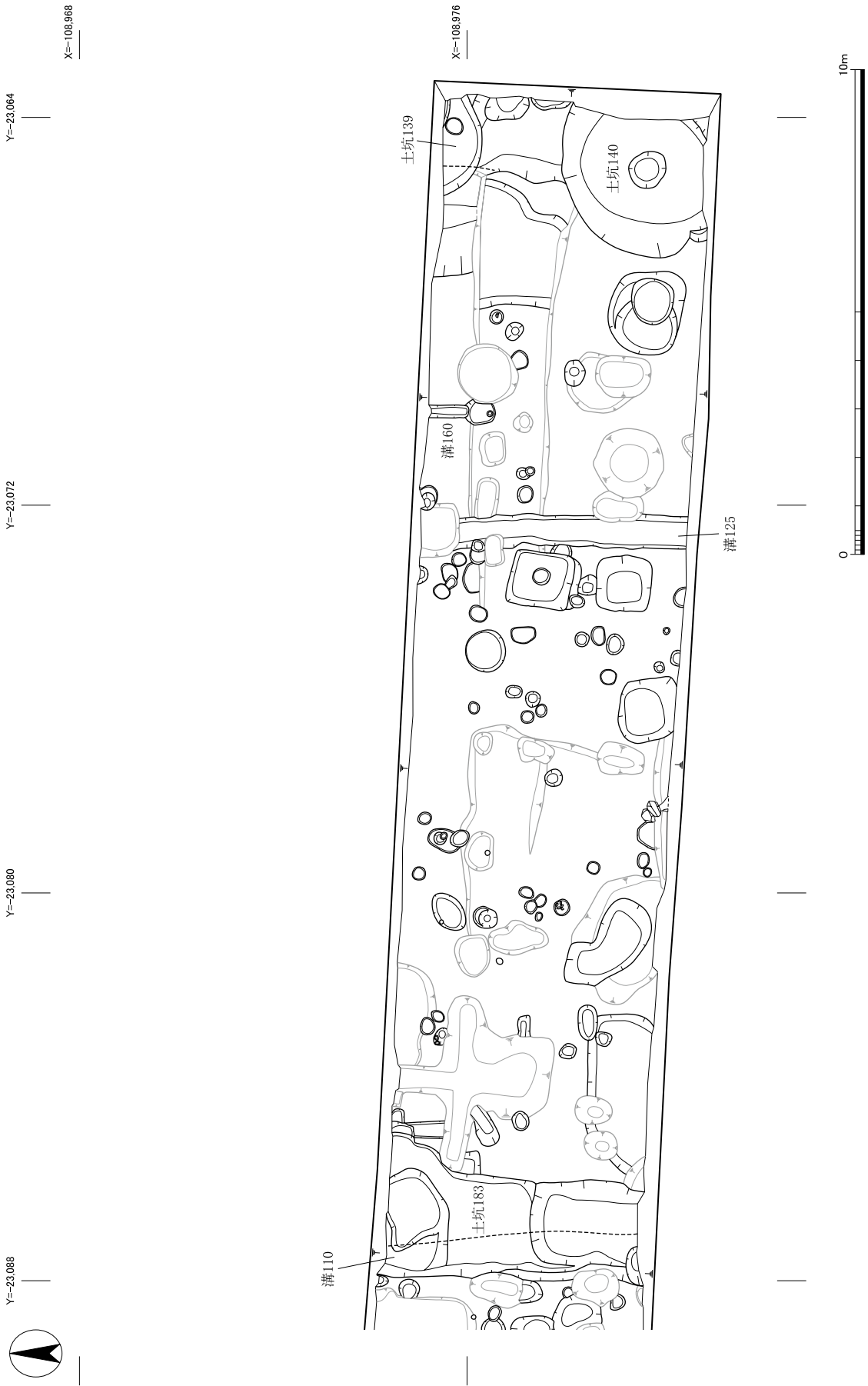
圖 版

調査区平面図1 (1:120)

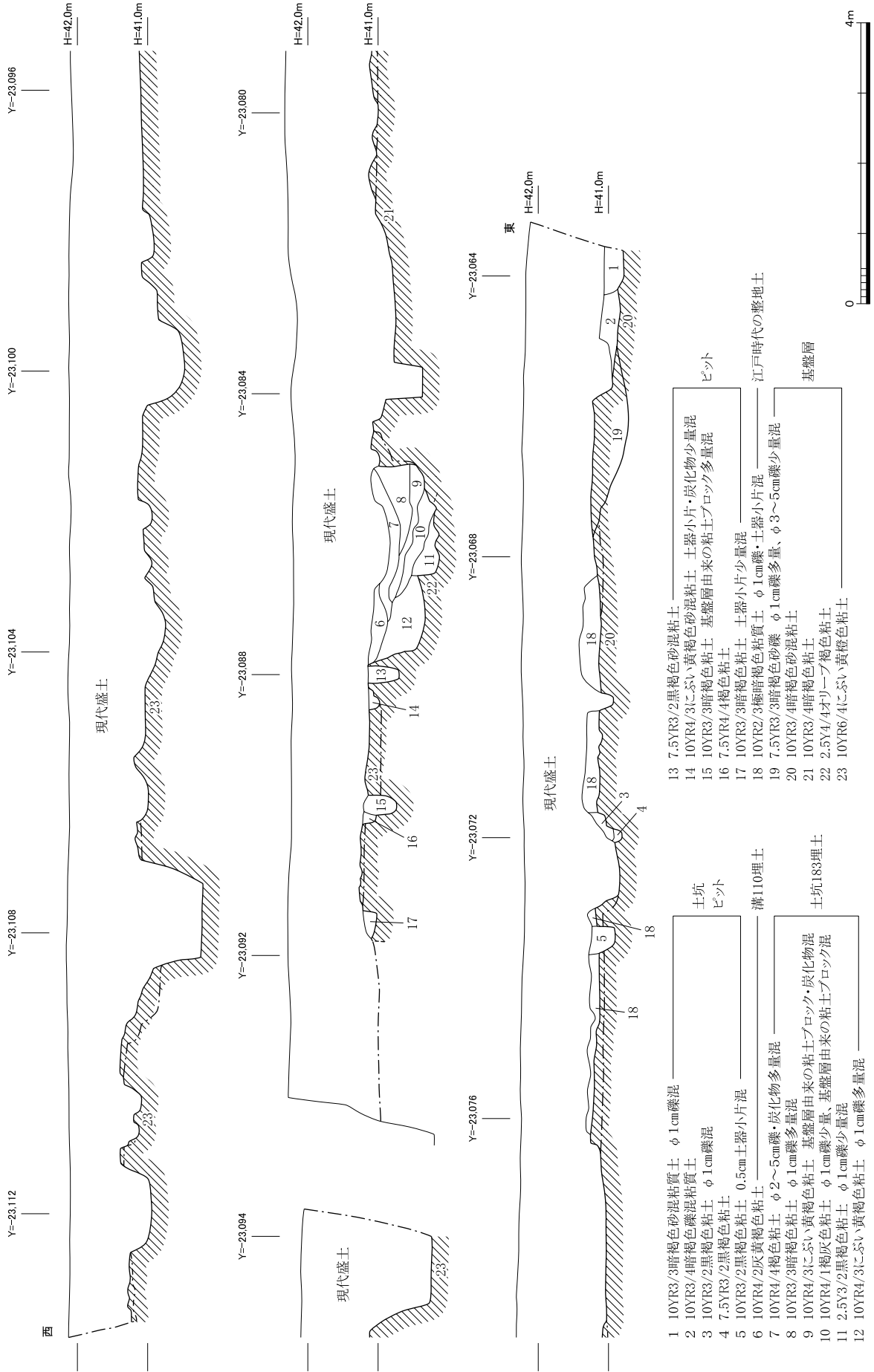


※ A-A'、B-B'、C-C'断面は図版6に対応。

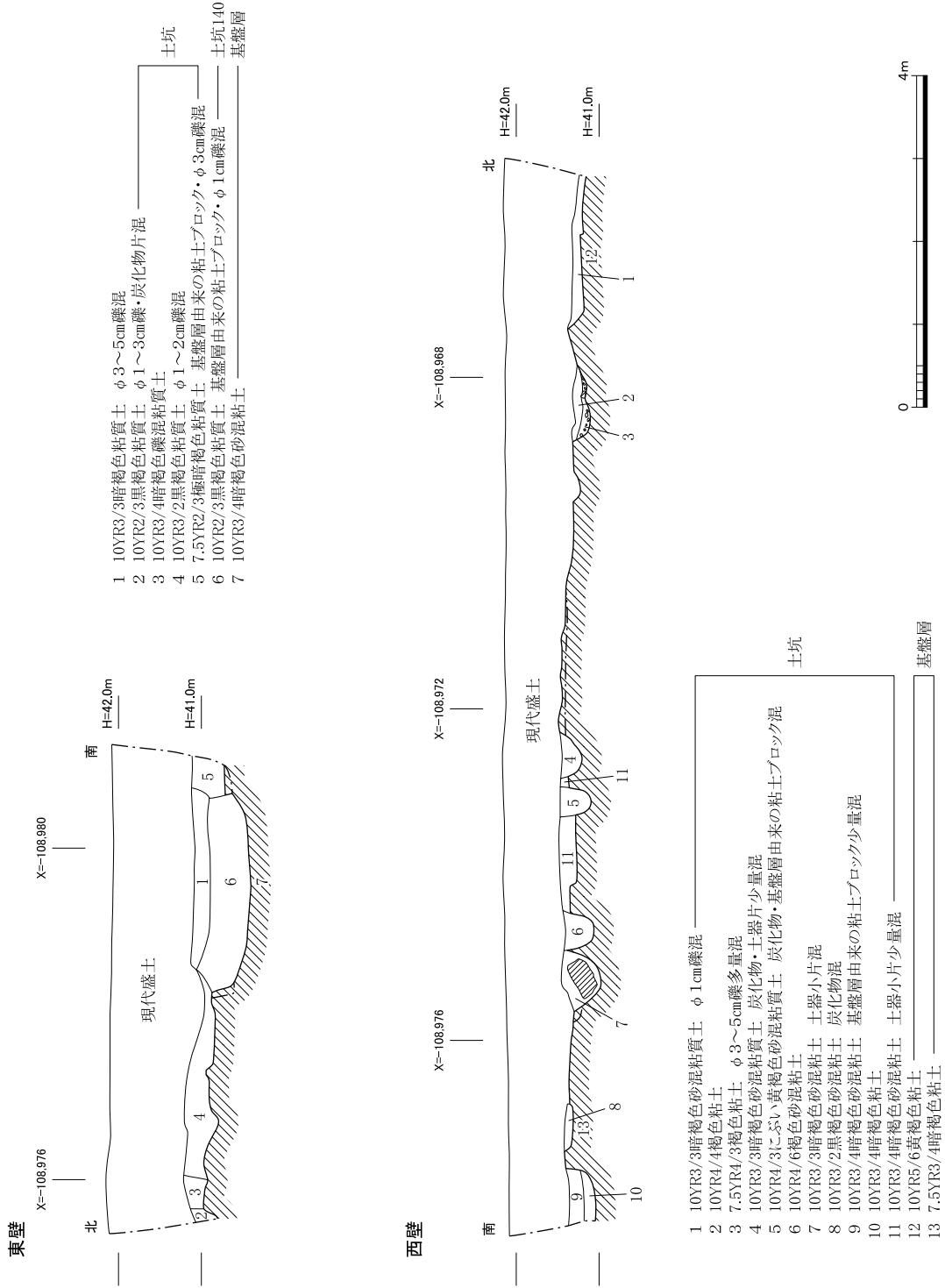
図版2
遺構



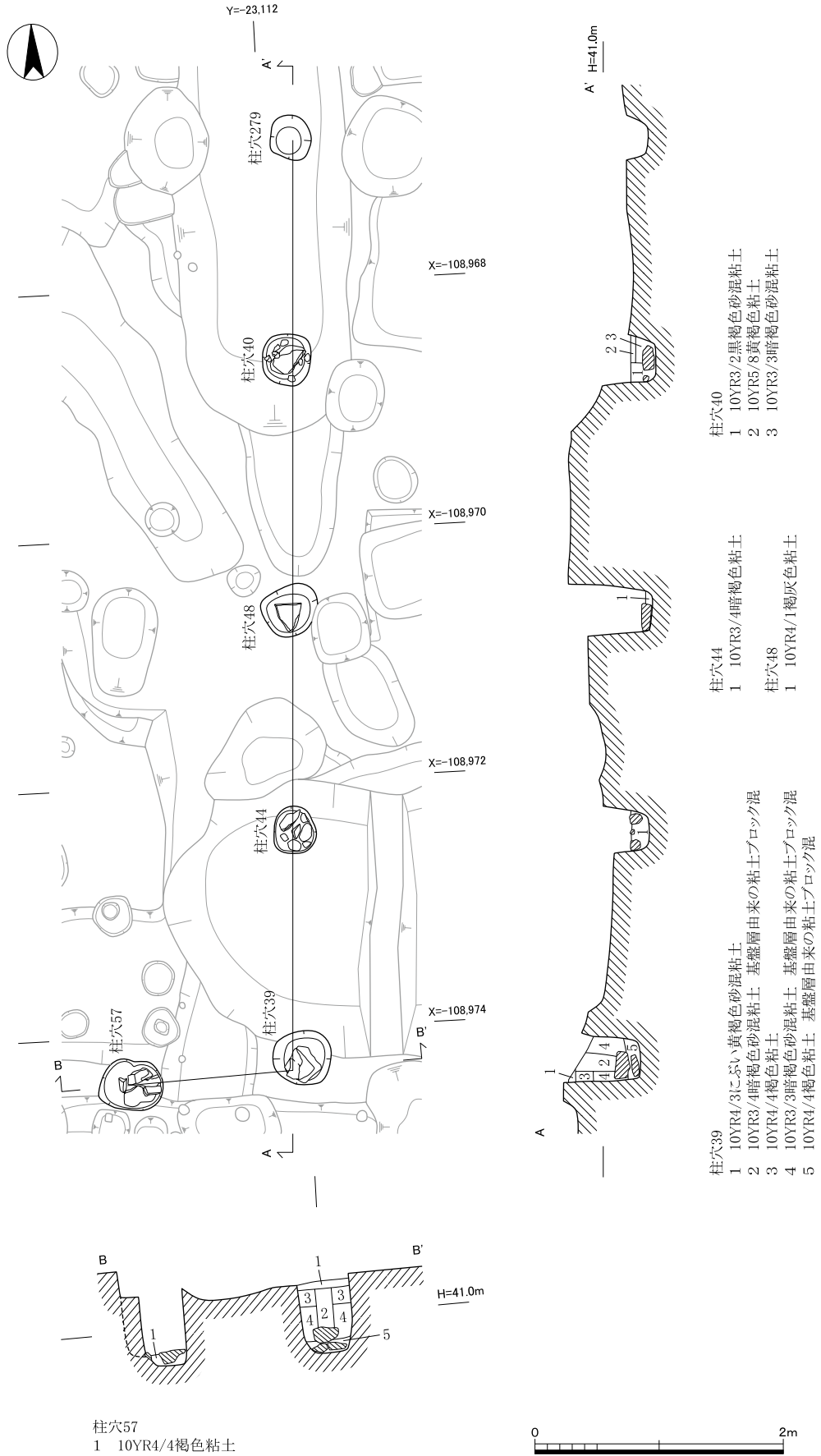
調査区平面図2 (1 : 120)



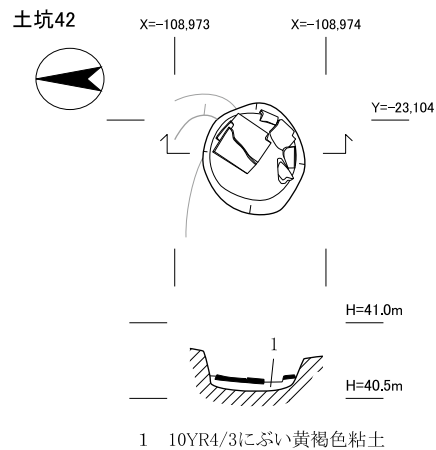
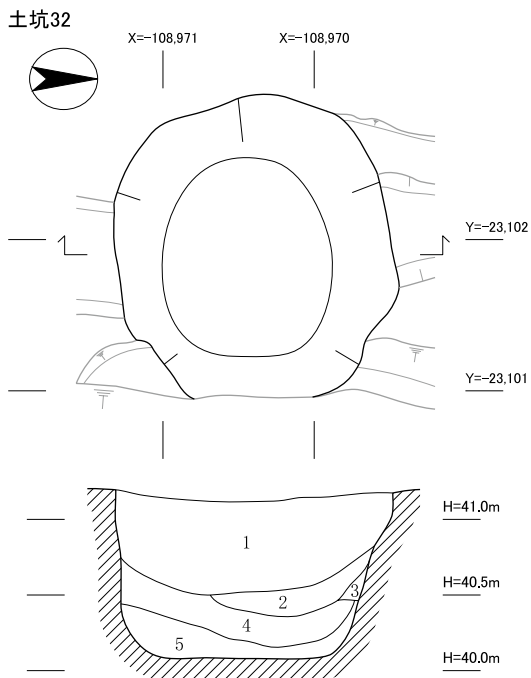
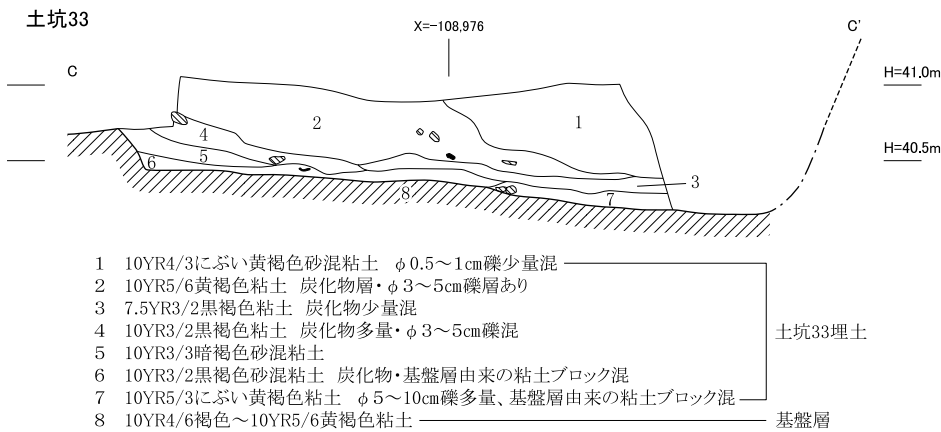
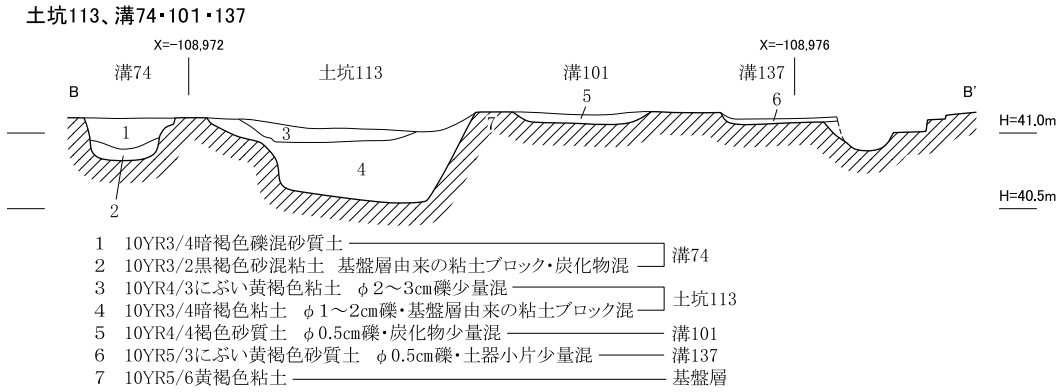
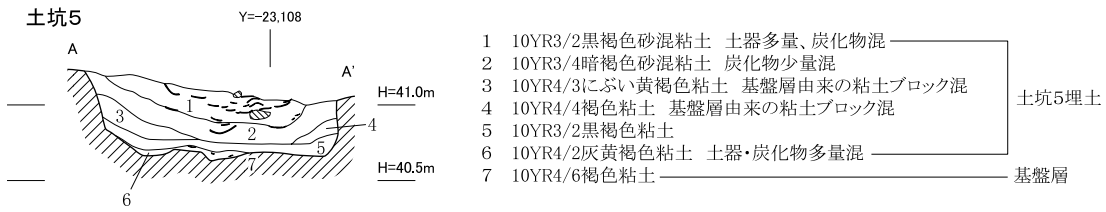
調査区北壁断面図 (1 : 80)



調査区東壁・西壁断面図 (1 : 80)



柱列1実測図 (1 : 50)

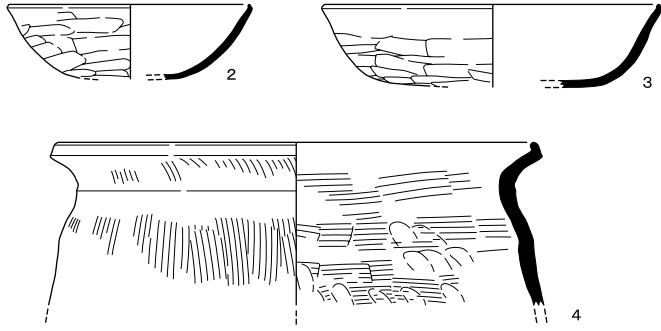


※ A-A'、B-B'、C-C'断面は図版1に対応。

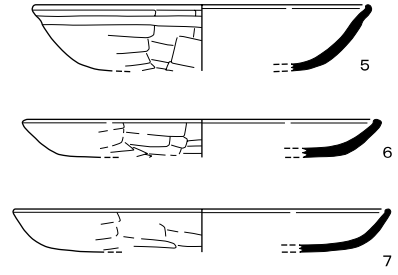


土坑5・33・113、溝74・101・137断面図、土坑32・42実測図（1：50）

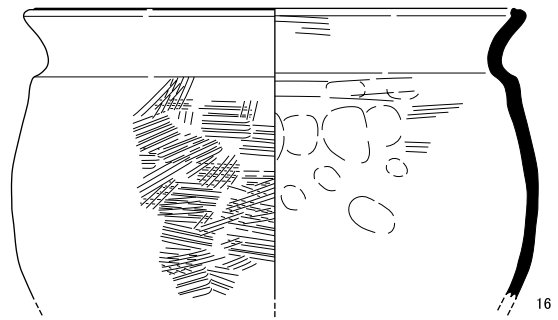
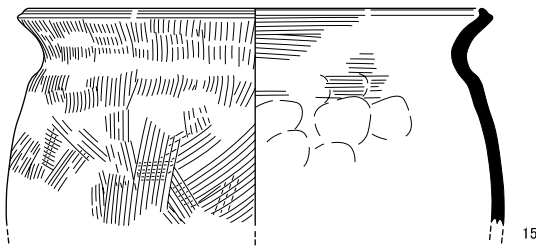
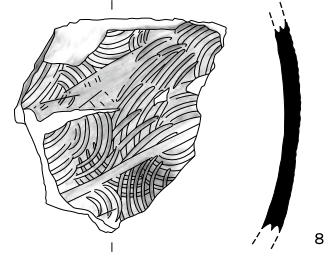
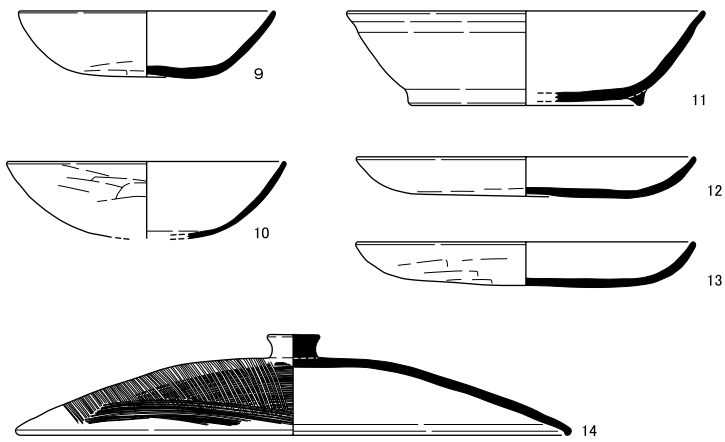
土坑36



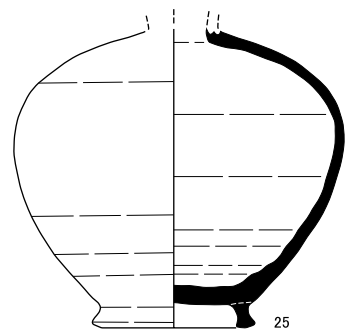
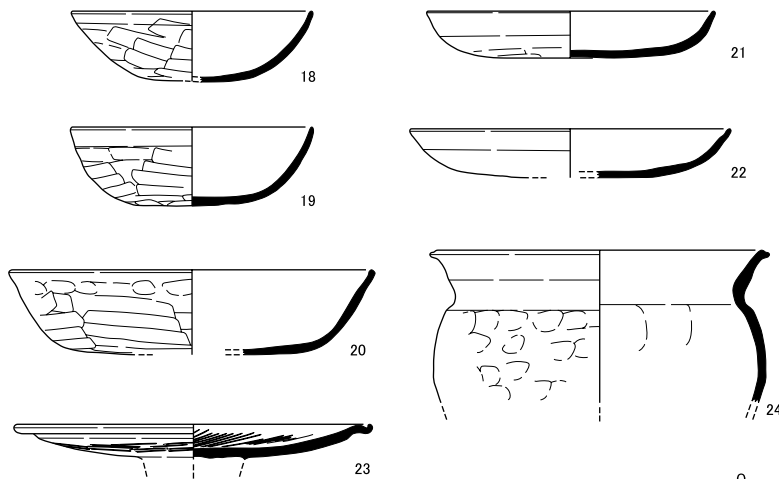
土坑140



土坑34

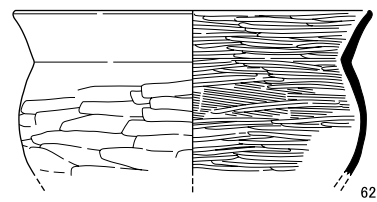
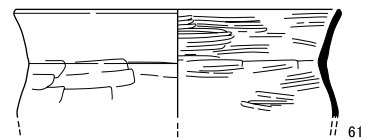
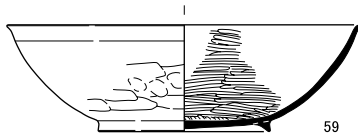
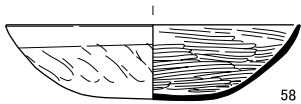
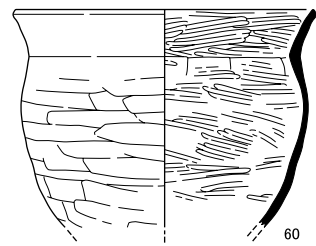
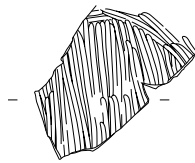
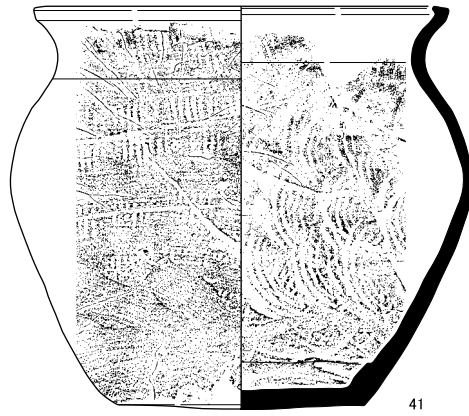
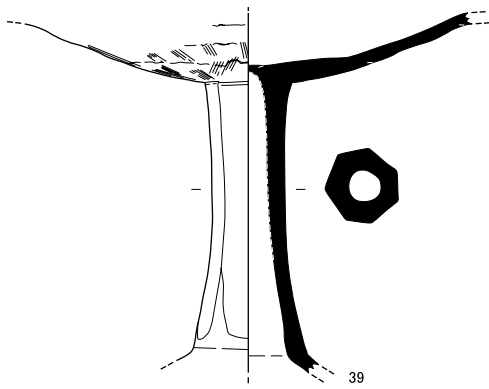
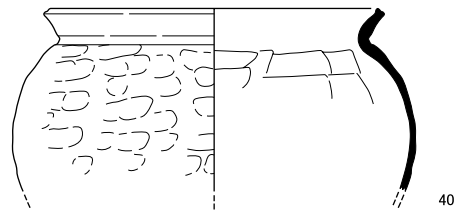
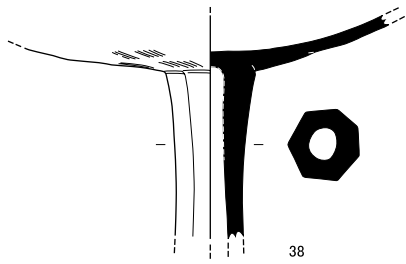
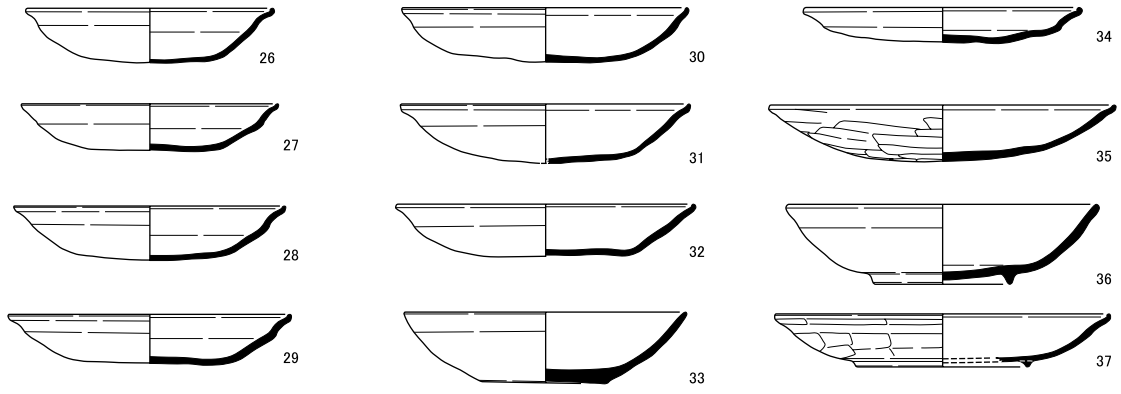


土坑113

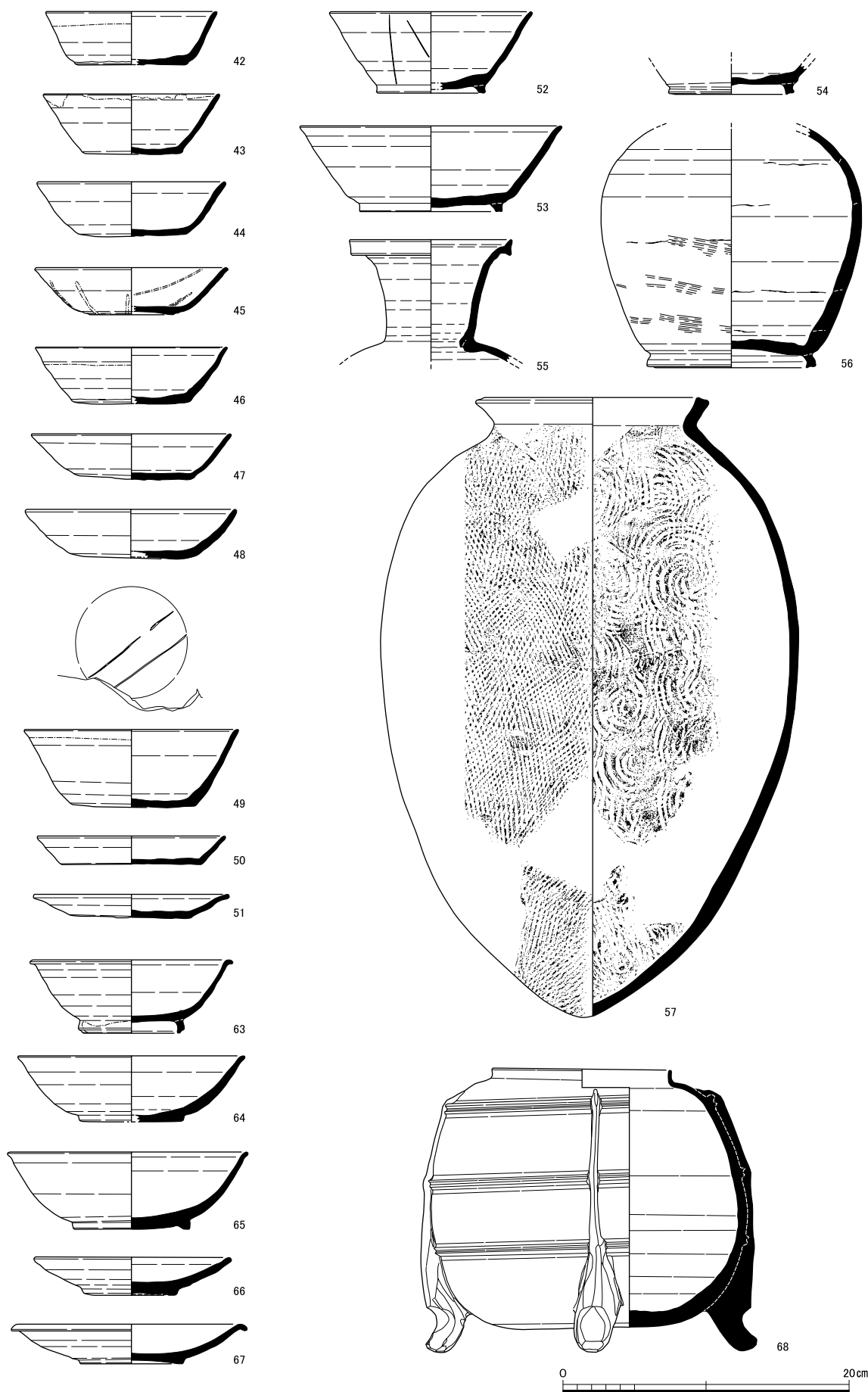


土坑36·140·34·113出土土器实测图(1:4)

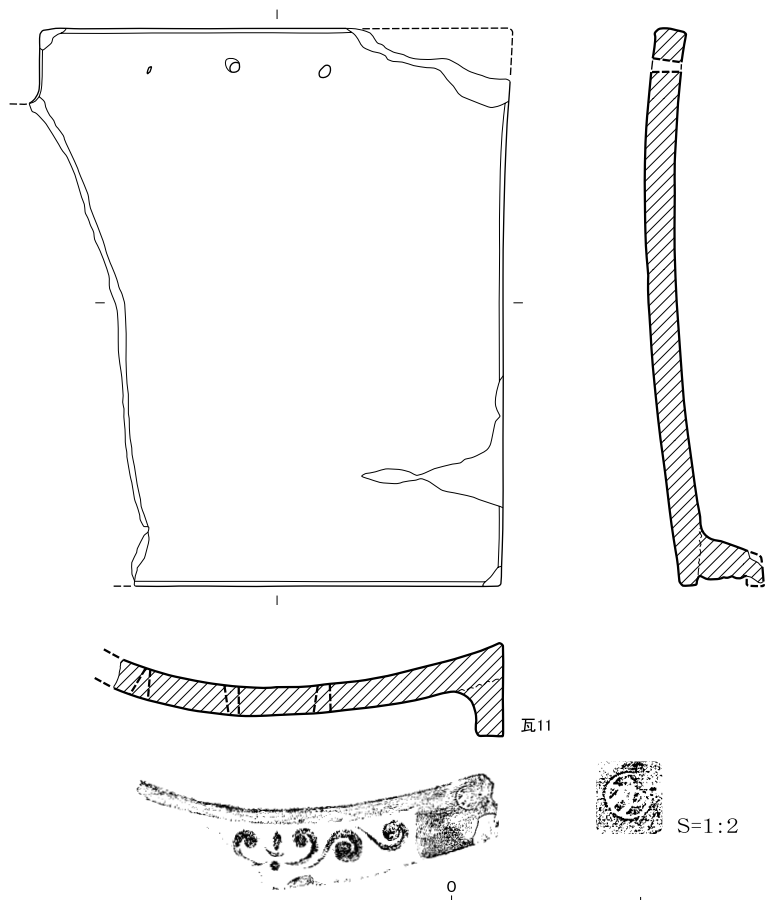
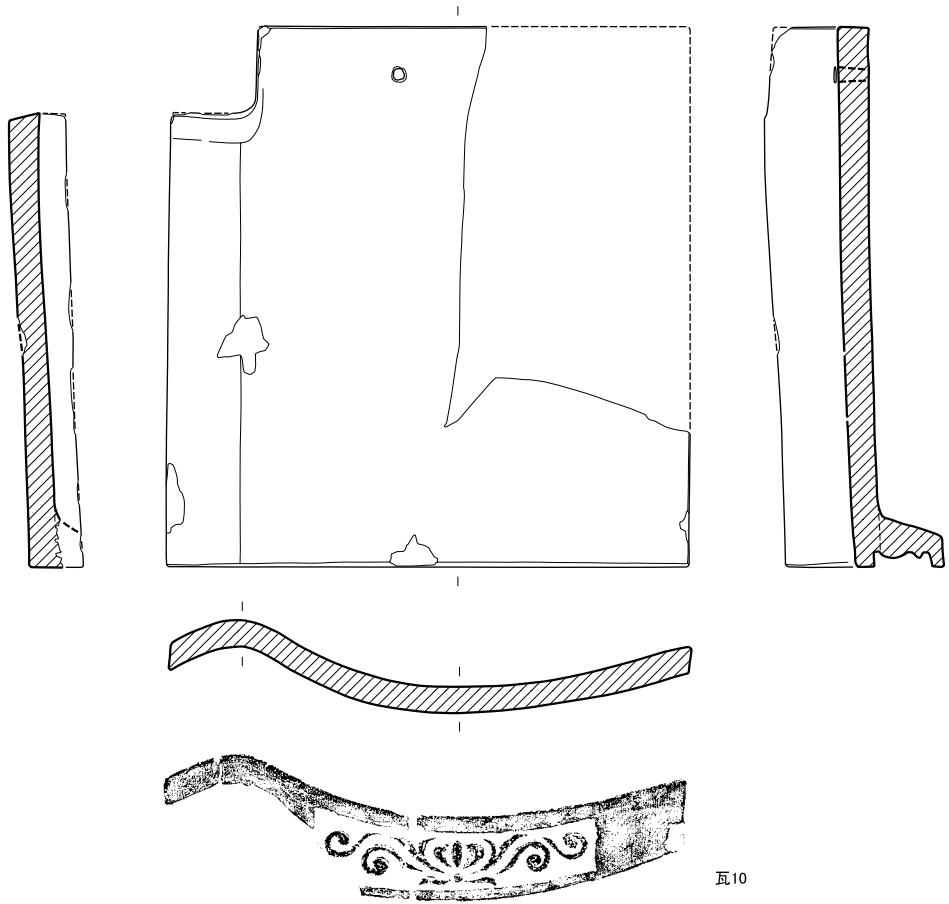
图版 8
 遺物



土坑 5 出土土器実測図 1 (1 : 4)



土坑5出土土器実測図2 (1:4)



瓦類拓影及び実測図2 (1:4)



調査区全景（西から）



1 土坑5 遺物出土状況近景（南西から）



2 土坑5 遺物出土状況（北西から）



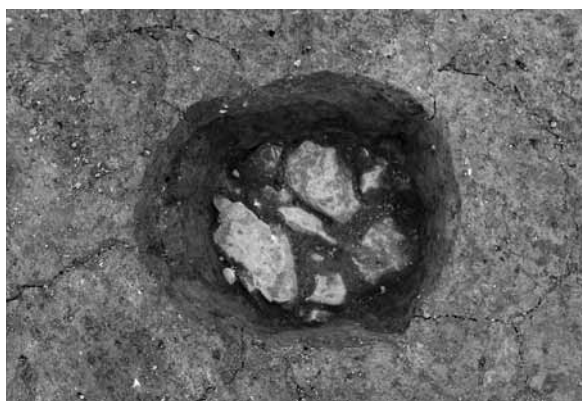
3 土坑5 完掘状況（北から）



1 柱列1完掘状況（北から）



2 柱列1 柱穴40半裁断面（西から）



3 柱列1 柱穴44根固め石検出状況（西から）



4 土坑120遺物出土状況（北西から）



5 土坑42瓦出土状況（北東から）



6 溝75遺物出土状況（北東から）



土坑34·113出土土器



土坑 5 出土土器 1



土坑5出土土器2



溝75、土坑33・120出土土器

報告書抄録

ふりがな	へいあんきゅうもんのつかさあと・しょういんあと、にじょうじょうきたいせき							
書名	平安宮主水司跡・醫院跡、二条城北遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2022-5							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区	26100	2	35度	135度	2022年7月	440㎡	マンション建設
にじょうじょうきたいせき 二条城北遺跡	たけやまちどおりせんぼん 竹屋町通千本		238	01分	44分	19日～2022		
	ひがしいるしゅぜいちよう 東入主税町			03秒	49秒	年10月7日		
	1120番ほか							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮跡	宮殿跡	平安時代	土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類		平安時代前期の土坑から多量の土器が出土した。		
二条城北遺跡	集落跡	安土桃山時代～江戸時代	柱列、土坑、溝	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、瓦埴類、銭貨、鉄製品、砥石				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-5

平安宮跡主水司跡・齋院跡、二条城北遺跡

発行日 2023年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151